

老いてゆくモダニズム女性作家たち
——キャサリン・マンスフィールドとヴァージニア・ウルフ——

手塚 裕子*

Aging Modernist Women Writers
Katherine Mansfield and Virginia Woolf

Yuko TEZUKA

Abstract

The most dramatic, complex, and rapid changes in the modern industrialized world might be the huge increase of the elderly population and the declining birth rate. In 1950, the average life expectancy in Japan was about 60 years. In 2007, that figure had risen up to 85 years. Our society has to cope with the increasing numbers of elderly persons. An aging society has brought us various new kinds of problems. To solve these problems, I would like to investigate works written by Modernist women writers such as Katherine Mansfield and Virginia Woolf. Our society in the 21st century has its very beginnings in Modernism. I think I could find some hints for solutions by reading Modernist works. I will focus Mansfield's "Miss Brill", "The Canary", and Woolf's *The Years*. I will also study aging and death in the diaries and letters of Katherine Mansfield and Virginia Woolf.

Key Words: Katherine Mansfield, Virginia Woolf, Modernism, and Aging.

*教授 英文学

手塚裕子

序論

若さは賜物であり、齢は芸術である。

—レオナルド・ダ・ヴィンチ

2007年3月沖縄でジェロントロジー国際総合会議が開かれ、ダ・ヴィンチの有名な言葉がキーワードとして用いられた。ジェロントロジーとは、加齢について学際的に研究する新しい学問であるが、超高齢化社会を迎えて、現在、最も注目されている学問領域のひとつである。死と老いは、昔から問われてきた普遍のテーマであるが、今の日本では、「老い」は現代特有の問題を帯びているように思われる。現代の老いの特徴の第一は、まず、平均寿命が延び、多くの人々が以前よりずっと長く生きるようになったことである。1950年の日本人の平均寿命は、先進国の中ではかなり短く、女62.97歳、男59.57歳だった。定年退職後、または子どもが成人して独立した後、残された時間は短かったか。しかし2007年、日本人女性の平均寿命は世界最高を更新して85.99歳となった。男性は79.19歳で世界3位である。仮に65歳で現役引退したとしても、女性には20年、男性には15年という長い老後が待っている。20年間の生活を支えるお金の問題、病気で倒れた場合の長引く介護の問題など、年金や医療制度改革をめぐる混乱は大きな社会問題となっている。

第二の特徴は、都市化と女性の社会進出に伴い、核家族化や非婚率がすすみ、都市で一人暮らしする老人が増加したことである。社会から遮断され孤立した高齢者が心を病んで鬱病になり、自殺するケースが増えている。2007年度の高齢者の自殺は、12107人と過去最多で、全体の36.6%を占める。その主な理由は、貧困による生活苦、肉体的な健康上の理由、そして鬱病である。なだいなだ氏は、「老人というのは、慢性のうつ状態にあるようなものだ」と述べ、精神科医の竹中星郎氏は、「都会のアパート暮らしでは周囲から完全に遮断された中、経済的・心理的に追い詰められてしまう人が少なからずいる。そうした構造が、高齢者だけでなく、社会全体に広がっているように思える」と述べている¹⁾。

高齢者の貧困や医療については、社会制度や医療制度の整備に救済の道を探すべきであろうが、孤独な高齢者の心の問題については、精神医学はもちろん、文学作品の中に解明の糸口を見出すことができると思う。そこで、日本よりも早く都市化が発展し、女性の社会進出、核家族化、非婚化が進んだ国、イギリスの20世紀初頭モダニズムの時代の文学、具体的には、Katherine Mansfield (1888-1923) と Virginia Woolf (1882-1941) の作品の中に、現代社会の老いの問題の萌芽を探ってみたい。

1. 現代社会の原型としてのモダニズム

今から 100 年前のイギリス、モダニズムの時代は、21 世紀現代社会の価値観、結婚観、家族制度、社会制度の原型を作った時代である。19 世紀ヴィクトリア朝の権威主義に反発して、20 世紀初頭に、モダニズムと呼ばれる文化や芸術を一新する改革運動が起きた。婦人参政権運動もピークを迎え、女性たちは地位の向上、機会の均等などをめざして、社会を改革しようとする機運に満ちていた。1921 年、アメリカの Margaret Sanger (1879–1966) は、American Birth Control League を設立し、性と生殖に関する知識を女性たちに啓蒙し、産児制限の思想を広めた。1928 年、イギリスは念願の婦人参政権を獲得し、1929 年、Virginia Woolf は、*A Room of One's Own* を出版し、女性が自分らしい人生を生きるためには、産む子どもの数を 2～3 人に減らし、家の中にも自分の個室をもち、年 500 ポンド程度の収入が必要であると主張した。この主張は、現代の日本でも通用する。上野千鶴子氏も『おひとりさまの老後』の中で Woolf のこのエッセイに言及し、「これはいまでも真理である」と述べている²⁾。

Virginia Woolf の父は、典型的な家父長だった。1904 年に父が死ぬと、子どもたちは高級住宅街ハイパーク・ゲイトの家を出て、ロンドン北部のブルームズベリーに引っ越す。新しい家に住み始めた時、Woolf は、大きな解放感を味わう。この家が舞台となって、後にブルームズベリー・グループと呼ばれる前衛的な芸術家グループが形成される。また、Katherine Mansfield は、自分の文学的才能を開花させるため、故国ニュージーランドを出て、1908 年、単身、ロンドンに来て、独身の女性芸術家たちが住むビーチャム・ハウスで一人暮らしを始め、作家として世に出る機会を窺っていた。Woolf にしても Mansfield にしても、作家として活躍するために、ロンドンには重要な役割を果たしている。大都市は、人間関係のしがらみも弱く、しきたりや因習に縛られることも少なく、女性たちも自由に生きることができたのである。

今日でも多くの農村の女性たちが、農家に嫁ぐのを嫌って都会に出て来るのは、明らかに、都会生活の自由が大きな魅力となっているからである。だが、老後考えた時、都市に住み、自由を謳歌していた新しい女性たちは、突然、不安になる。田舎の大家族での暮らしは、若いときには自己犠牲と忍従を強いたが、年老いた時には、子や孫に囲まれた賑やかな老後を約束していた。Mansfield の自伝的小説、“At the Bay” に登場する祖母は、家族のために働き続けた人だったが、年老いた時には、“You’re not to die.” と懇願する可愛い孫娘を膝に抱いている。Mansfield は、祖母や母が決して手に入れることができなかつた大きな自由を謳歌していたが、彼女はたった一人で老いと死と向き合わなくてはならなかつた。大家族制は、孤独な老いと直面しないための、いわば安全装置だった。大都市に住む新しい女性たちは、自由の代償として、

その安全装置を失った。

Mansfieldの母は、退屈な結婚生活を倦み、自由な冒険にあこがれていたが、母は最期まで家族に守られ、孤独を知らなかった。孤独な闘病生活をおくる Mansfield は、しばしば母を羨むこともあったが、今さら、過去の因習に縛られた大家族の時代に逆戻りすることはできない。家父長のいる大家族の中に生まれながら、自己実現のために自由を追求して大家族を飛び出した、Woolf と Mansfield が、どのように「古い」と対峙してきたのか。それを探ることは、21世紀に生きる私たちにとって、大きな意味のあることと思われる。以下、Mansfield と Woolf の作品に表れた老女、および作者である彼女たち自身の老いについて詳細に研究していきたい。

2. “Miss Brill” — 仮想現実の世界に棲む傷つきやすい老婦人

Katherine Mansfield は、1923年に34歳の若さで結核のため死去したので、年齢的には老人ではないのだが、29歳で咯血してからの5年間、絶え間ない咳に苦しみ、常に死の恐怖に怯え、体力は衰弱して歩くこともできなくなり、容貌はやせ細って、年よりずっと老けて見えるようになった。死を前にした壮絶な闘病生活は、Mansfieldにとって、まさに「古い」そのものだった。Mansfield は、病状が悪化した1920年頃から、都市に住む一人暮らしの老女を主人公とした作品を描くようになる。その中から、まず最初に、“Miss Brill” をとりあげてみよう。

“Miss Brill” は、1920年11月26日、夫、John Middleton Murry (1889–1957) が編集長をつとめる雑誌 *The Atheneum* に掲載された。当時、Mansfield は、ロンドンの寒い冬を避けて南仏の避寒地マントンにひとりで滞在していた。Mansfield は、この作品の完成度の高さに満足し、特に音楽的効果は、“a musical composition” の領域にまで到達していると自負していた。“Miss Brill” は、Mansfield のお気に入りの作品であり、Murry や多くの友人たちの評判もよかった。ところが、現代の小説家 Margaret Drabble (1939–) とフェミニスト批評家 Elaine Showalter (1941–) は、“Miss Brill” は非常に残酷な作品であると指摘している³⁾。Drabble は、「どれほど素晴らしい芸術であったとしても、私は、ああいう作品は書きたくありません」とまで語っている。“Miss Brill” のテーマは、老女の孤独だった。このテーマは、1920年代よりも、現代において、より切実な問題となっているので、当時の人々が見過ごしていた「残酷さ」に、Showalter や Drabble は、敏感に反応したのでだろう。では、“Miss Brill” を読んでみよう。

“Miss Brill” は、フランスで一人暮らしをするイギリス人の老婦人である。彼女はフランス人に英語を教えたり、体の不自由なイギリス人紳士に新聞を読んであげたりしながら自活し

ている。日曜日の午後は公園で過ごすのが、日課だった。枯葉の散り始めた或る秋の日曜日、Miss Brill は、お気に入りの狐の襟巻を箱から出す。Miss Brill は、まるで生きているペットに話しかけるように、襟巻に話しかける。公園の広場ではバンドが賑やかな音楽を演奏していた。Miss Brill の他には、一組の老夫婦が座って、バンドの演奏を聞いていた。Miss Brill は、じつと耳を澄まして老夫婦の会話を聞き取ろうとする。実は、他人の会話を聞くことが、Miss Brill の最大の楽しみだったのである。

Miss Brill always looked forward to the conversation. She had become really quite expert, she thought, at listening as though she didn't listen, at sitting in other people's lives just for a minute while they talked round her. (p.374)

Miss Brill は、公園にいる見知らぬ人々を観察して、彼らの会話の断片をつなぎ合わせ、物語を作り上げていくうちに、まるで公園が一つの劇場となって、自分はお芝居を見ているような錯覚にとらわれてゆく。

Oh, how fascinating it was! How she enjoyed it! How she loved sitting here, watching it all! It was like a play. It was exactly like a play. (P.376)

臆病で人見知りする Miss Brill は、実際には見知らぬ人に声をかけることはできないが、ただ、他人の会話を傍でじっと聞いているだけで彼女は幸福だった。やがて彼女は、公園にいるすべての人々と理解し合えたような途方もない幸福を感じて涙ぐむ。

And Miss Brill's eyes filled with tears and she looked smiling at all the other members of the company. Yes, we understand, we understand, she thought — though what they understood she didn't know. (p.376)

Miss Brill には、生きたペットより毛皮の襟巻、現実の友人より物語の中の友人の方が、好ましいのである。現実世界のペットや友人は、時として彼女を傷つけるが、物語の中の友人や毛皮のペットは、安全である。Miss Brill は、いわゆるヴァーチャル（仮想現実）の世界に安住する人なのである。

だがその日、Miss Brill は喜びのあまり、不用意に他人に近づきすぎた。老人の多い公園に、

珍しく若い男女が現れる。一見して恋人同士とわかる男女を見て、Miss Brillは胸を躍らせる。素敵な恋人同士の会話を聞こうとして、Miss Brillは、いつもより熱心に耳をそばだてて、二人に近寄る。すると若い男女は、Miss Brillが聞き耳をたてていることに気づいてしまう。もちろんMiss Brillには悪気はなかったのだが、彼女の存在はせっかく盛り上がっていた二人の恋のムードに水をさした。怒った男は、「あのバアサンのせいだね。なんでこんな所にいるのかなあ。誰もバアサンなんか必要としてないのに」と言うと、女は、「ヘンなのは、あの毛皮よ。まるでタラのフライみたい」と嘲笑する。「あっちへ行けよ」と男は罵る。

二人とも小声で話していたのだが、耳のよいMiss Brillは、すべてを聞き取り、呆然として家路につく。いつもなら途中のパン屋でハニーケーキを買うのだが、その日は何も買わず、一人暮らしの暗い部屋に帰り、羽根布団の上に長い時間座り込んだ後、狐の襟巻を箱にしまうが、蓋をしめる時、何かが泣いているような声が聞こえた。こうして、Miss Brillが作り上げた仮想現実の世界でのコミュニケーション、他者との連帯感は、無残にも消滅し、彼女の目前には、真っ暗な孤独が待ち受けていた。

現代の日本の公園やデパートの屋上のベンチに座る多くの老人たちの中にも、Miss Brillのように、周囲の会話に聞き耳をたて、他人とのかりそめのコミュニケーションを楽しむ人がいるのではないだろうか。そして彼らのささやかな楽しみを、若い世代の無神経な嘲笑が傷つけるという出来事も、日常的に起きているであろう。加害者の若者には、自分たちが加害者になったという自覚はない。しかしMiss Brillは、その後おそらくもう二度と、公園に来られないだろうし、狐の襟巻をすることもできないだろう。そして、自宅に引きこもって、外の世界とのコミュニケーションを遮断して、完全な孤立へと自らを追い込んでいくのではないだろうか。老人は自分からすすんで孤独になるわけではない。日常の些細な事件、若い世代からの冷笑などが契機となって、社会から脱落し、孤独へと追い込まれるのである。この作品は、いつでもどこでも起こりうるような小さな事件が、老人の心に致命的な打撃を与えうることを示すという点で非常に残酷であり、Drabbleが言うとおりの、「これを読んだ後、自分の中の何かを永遠に変えてしまう」ような恐ろしい作品である。

3. “The Canary” 一追憶の中に生きる孤独な老婦人

“Miss Brill”から2年後、1922年7月に書かれた“The Canary”の語り手は、あの事件の後、社会から完全に離脱し孤立してしまったMiss Brillを思わせるような孤独な老婦人である。“The Canary”は、Mansfieldが生前に完成させた最後の作品である。当時スイスで療養して

いた Mansfield は、放射線治療を受けるため、パリに来た。南フランス、イタリア、そしてスイスへと転地療養をしてきたが、思うような効果が得られず、結核の病状は悪化していくばかりだった。Mansfield は、当時としては最先端医療であるマヌーキン博士の放射線治療に最後の望みをかけた。切羽詰った状況の下で、Mansfield は最後の力をふりしぼって、パリのホテルの一室で3日間でのこの作品を書き上げる。

“The Canary” は、劇的独白の手法で書かれ、すべてが老婦人の語りで構成されている。おそらく、この老婦人は誰もいない部屋で一人語りをつづけているのだろう。Miss Brill は他人の会話に聞き耳をたてていたが、この語り手は他人に対して全く興味を示さない。ただ、死んだペットのカナリアの思い出を一人で語りつづけるのみである。Miss Brill のペットは狐の襟巻だった。生きているペットではなかったが、一応、形を持つ存在だった。しかし老婦人のカナリアは既に死に、鳥籠も片付けられ、今は籠をかけていた釘だけが壁に残されている。彼女はその釘をみながら、カナリアとの出会いからその死までを語る。彼女も Miss Brill 同様、若者から「カカシ」と嘲笑されたことがあった。

I was nothing to them. In fact, I overheard them one evening talking about me on the stairs as “the Scarecrow.” No matter. It doesn’t matter. It doesn’t matter. Not in the least. I quite understand. They are young. (p.540)

若者の嘲笑に対して、彼女は平静を装うとしているが、“It doesn’t matter.”を何度も繰り返しているところを見ると、彼女とて内心は穏やかではなかったようである。しかし、彼女は最終的に「彼らは若い」と突き放すように言う。老婦人は若者たちに完全に背を向け、カナリアとの追憶の世界に閉じこもることで、傷つきやすい心を守ろうとする。

カナリアは、昔、炭鉱で暗い坑道に入る時に炭鉱夫たちが連れていた鳥である。人間よりも毒ガスに敏感なカナリアが歌っている間は、ガス漏れの危険はないが、もし、カナリアが歌うのをやめたら、それはガス漏れの危険信号である。だからカナリアの死んだ部屋に住む老婦人の孤独は、もう、危険の領域に達していると読み取ることもできるだろう。

そして老婦人はモノローグの最後を次のような言葉でしめくくる。

I must confess that there does seem to me something sad in life. It is hard to say what it is. I don’t mean the sorrow that we all know, like illness and poverty and death. No, it is something different. It is there, deep down, deep down, part of one, like one’s breathing.

However hard I work and tire myself I have only to stop to know it is there, waiting. (p.451)

“The Canary”がMansfieldの最後の作品であるから、この言葉は、死にゆくMansfieldの“dying message”と考えられる。Mansfieldは、病気とか貧困とか死というようなよく知られた悲しみとは別の悲しみが、人生の深いところにあると言う。Mansfieldの日記を読むと、病気の苦しみや死の恐怖について語った後、必ずといってよいほど、夫のJohnが彼女の苦しみを理解してくれないことを嘆いている。言い換えれば、Mansfieldにとって、病気の苦しみよりも、愛する家族が彼女の苦しみを理解してくれない、孤独の悲しみの方が辛かったようである。

Why am I haunted every single day of my life by the nearness of death and its inevitability!
I am really diseased on that point! I can't speak of it. If I tell J, it makes him unhappy. If I don't tell him, it leaves me to fight it. I am tired of the battle. No one knows how tired.

(1921年11月24日の日記)⁴⁾

死の3ヶ月前の日記には、「この道を歩いたことのない健康な人には、(私の気持ちは)わからない。だから一人で(死に向かって)勇気をもって進まなくてはならない」⁵⁾と、死を覚悟した言葉を記して、死に場所に決めたフォンテーヌ・ブローにあるグルジエフの研究所へと一人向かう。死ぬときは、誰でも一人である。たとえ愛する家族に看取られるとしても、死に行く人の気持ちは残される者には理解できないとすれば、やはり死は究極の孤独なのではないだろうか。

4. *The Years* —しなやかに年齢を重ねる女性

Mansfieldが老いに対して、ネガティブな面を見せたのと対照的に、Virginia Woolfの描く老いはポジティブである。Mansfieldは34歳で死んだが、Woolfは33歳で処女作、*Voyage Out*を出版し、50代では、文字通り人生の完熟期“prime of life”を迎え、作家としての名声を得、次々に新しいエッセイや小説を発表し、経済的にも恵まれていた。Woolfが50代のときに書いた小説の中には、ポジティブに生きる中高年の女性たちが多く登場する。それはWoolf自身が、年齢を重ねるごとに、ますます自由になっていく解放感を実感できたから、老いをポジティブにとらえることができたのであろう。次に、Woolfの長編小説、*The Years*を取り上げ、

ポジティブに老いていく Eleanor の人生を辿ってみよう。

The Years は、Woolf が生前に出版した最後の小説である。(次の *Between the Acts* は死後に出版された。) この作品は、ヴィクトリア朝時代の「1880年」の章から1937年の「現代」の章に至る約50年間のパジター家の人々の人生の軌跡を追う大河小説である。パジター家の娘たちは皆、個性的な生き方を見せるが、中でも長女 Eleanor の生き方に注目してみよう。

「1880年」の章に登場する Eleanor は、典型的な上層中流階級の娘、ヴィクトリア朝の家庭の天使である。病気の母に代わって、Eleanor は、まだ20歳くらいだが、気難しい父親のパジター大佐の機嫌をとり、幼い弟妹の面倒をみ、召使たちを監督し、エバコーン・テラスの事実上の女主人となっている。妹の Milly は、姉を「家庭内の争いを調和させ、慰めを与える人」として女神のように崇拝している。

It was much relief, especially to Milly's. Thank goodness, there's Eleanor she thought, looking up — the soother, the maker-up of quarrels, the buffer between her and the intensities and strifes of family life. She adored her sister. (p.10-11)

だが、優しい家庭の天使は、ヴィクトリア朝のモラルからの逸脱を許さない厳しい監督者としての顔もあわせもっている。カーテンの隙間から窓の外を覗き見している妹たちに対して、Eleanor は “Don't be caught looking” (p.15) と、厳しく叱責する。女性が窓から外を覗き見するというのは、当時、とてもはしたない行為と考えられていたからである。

次の「1891年」の章では、弟妹たちは独立して家を出て、Eleanor だけが父の世話をするために独身のままエバコーン・テラスに残っている。母の死後、父の世話をするために長女が家に残ることは珍しいことではなかった。だが、Eleanor の場合、家の犠牲になったというよりは、むしろ父との生活を楽しんでいるようにも見える。年とともに父も気性が穏やかになり、二人は兄と妹のように仲良く暮らしている。

Eleanor は老いた父に代わって、借家の管理も任されるようになった。雇っている管理人の男が主人の金をごまかそうとしていることに気づいた Eleanor は、「大佐の娘」としての威厳に満ちた態度で、「恥を知りなさい」と厳しく叱り飛ばす。ここでの Eleanor は「主人は強い態度を示さなければ、召使から軽蔑される」という支配階級の論理に従って行動する。その帰り道、乗合馬車で Eleanor と乗り合わせた男は、彼女の服装や態度から見て、Eleanor は典型的な上層中流階級の未婚婦人 “Victorian spinster” であり、一度も情熱など感じたこともない女性だろうと思う。

The man on whose toe she had trodden sized her up; a well-known type; with a bag; philanthropic; well nourished; a spinster; a virgin; like all the women of her class, cold; her passions had never been touched yet not unattractive. (p.87)

Eleanor が硬い “Victorian spinster” の殻を破り始めるのは、「1911年」の章の父の死後からである。父を見送り、エバコーン・テラスを売却し、家政婦に暇を出し、Eleanor は生まれて初めて「家」から解放される。自由な時間を得て、彼女はさっそくスペインに旅行する。彼女は55歳になっていた。スペインから帰った Eleanor は、弟 Morris の妻の実家に招待され、夏休みを過ごすためにイングランドの田舎町を訪れる。その町では白髪の老婦人たちは、庭の草花の手入れをしたり、花束をかかえて近所の家のドアをノックしたり、自転車で訪問する牧師とお茶など飲みながら世間話を楽しんでいた。それは典型的なイギリスの老婦人の生活だったが、Eleanor は、そのような生活には魅力を感じられない。

She did not want to tap at cottage doors. And the clergyman — a clergyman was wheeling his bicycle up the hill — would come to tea with her. But she did not want the clergyman to come to tea with her. (p.170)

Morris の妻 Celia の実家には、Morris の学生時代の友人、Sir William Whatney も招待されていた。Whatney は、高級官僚として植民地インドを統治した後、引退してイギリスに帰国していた。彼がまだ独身で、しかも若い時、Eleanor に恋していたことを聞いた Celia は、Eleanor と Whatney の結婚を提案する。Sir の称号をもつ退役した高級官僚との結婚は、“Victorian spinster” である Eleanor にとって、理想的な結婚のように思われたが、彼女は彼との結婚を断る。「彼の人生は終わったが、私の人生はこれから始まる。私はまた新しい家を切り盛りしたくない。」(p.185)

時代は20世紀に入り、ヴィクトリア朝もエドワード朝も終わり、ジョージ5世の時代に入っていた。女性の地位は向上し、女性の生き方や価値観にも大きな変化が訪れ、もはや女性にとって家庭だけが唯一の居場所であった時代は終わっていた。今までは、完璧にヴィクトリア朝の規範通りに生きてきた Eleanor だったが、この時を境に、時代の変化に呼応しながら、自由に新しい人生を生き始める。交通手段も発達し、女性ひとりでも安全に外国旅行ができるようになったので、Eleanor はギリシア、ローマ、インドへの旅行を楽しむ。外国の強い陽射しを浴びて、Eleanor の顔は浅黒く日焼けし、髪は白髪となり、深い皺は刻まれたが、生き生き

とした瞳が若々しい印象を与え、外見だけでは、国籍も年齢も階級も判断できない、不思議な雰囲気をもつ女性へと変身してゆく。碧いガウンを着た時には「尼僧院長」のように、異国の服を着た時には「ジプシー」のように、そして魂について語る時には「予言者」のように見える。

こうして外国旅行は、Eleanorの風貌を変えていったが、若い外国人男性との出会いは、Eleanorの内面に大きな影響を与えた。「1917年」の章で、Eleanorはロンドン空襲の夜、従妹Maggieの家に招待され、Maggieの夫でフランス人のRenny、その友人でポーランド人の哲学者、Nicholasと出会う。Rennyの自由闊達な雰囲気は、格式ばったイギリス紳士とは別の魅力があった。彼は、もしEleanorが若い時に出会っていたら結婚したいと思うような男だった。そして魂について語るNicholasにEleanorは強い共感を覚える。

Eleanorにとって、魂について語り合えるような男性とめぐり会ったのは、初めてのことだった。彼女が若い頃、男の子たちは古典を学んで、パブリック・スクールから大学へ進学したが、女の子たちには高等教育の門戸は閉ざされていた。男たちは教育のない女を見下していたので、女たちと難しい話を真剣に論じようとはしなかった。ディナー・パーティーの席で隣に座る男たちは、皆、自分の自慢話をするばかりで、女たちは上手な相槌をうつことだけが求められていた。男女を分離して教育するヴィクトリア朝の教育制度の下で育ったEleanorの世代のイギリス人にとって、男女が対等に知的な議論をすることなど不可能だった。若い外国人のNicholasは、英語が流暢に話せなかったが、彼は喜んで、Eleanorと魂についての議論を展開する。彼と話しながら、Eleanorは次第に自分の魂が解放され、自由になっていくのを感じる。

Eleanor wished that he would go on talking — the man she called Nicholas. When, she wanted to ask him, when will this new world come? When shall we be free? When shall we live adventurously, wholly, not like cripples in a cave? He seemed to have released something in her; she felt not only a new space of time, but new powers, something unknown within her. (p.259)

最後の「現代」の章では、1930年代を迎え、Eleanorは70歳を越えたが、ますます好奇心旺盛で、キリスト教とは異なる文明の国、チベットへの旅行を計画している。人々は彼女を、“Old Eleanor; wandering Eleanor; Eleanor with the wild eyes...” (p.295)と呼ぶ。Eleanorはロンドンの安いフラットでひとり暮らしをしているが、彼女の部屋には、いつも、階級、性別、

国籍を超えた様々な人々が入り出て、にぎやかに議論している。

そのフラットには、エバコーン・テラスのような優雅な美しさはないが、浴室にはシャワーがついていた。Eleanor は甥の North にシャワーを見せて自慢する。若い North にはシャワーなど当たり前のものだったが、ヴィクトリア朝生まれの Eleanor にとって、シャワーには特別な意味があった。作者 Woolf が、*The Years* の着想を得たのは、1931 年の入浴中のことだった。

I have this moment, while having my bath, conceived an entire new book — a sequel to *A Room of Ones' Own* — about the sexual life of women; to be called *Professions for Women* perhaps — Lord how exciting! (1931 年 1 月 20 日の日記)⁶⁾

ヴィクトリア朝時代と現代を比べた場合、現代に生きていることに絶対的な喜びを感じる瞬間は、入浴の便利さではないだろうか。ヴィクトリア朝時代は、地下の台所で沸かしたお湯を浴室まで運んでいたから、入浴の準備には大変な時間と労力がかかった。しかも 8～9 人の大家族に浴室は一つしかなかったから、入浴の順番には自ずから家族内の序列が反映され、女の子たちの入浴は後回しにされていた。入浴は、日常生活の些細な出来事ではあるが、快適な入浴ができるかどうかは、実はかなり重要な問題である。Woolf は、1930 年代になって快適な入浴をしている時に、ヴィクトリア朝時代の不自由なお風呂を思い出し、その体感をもとに、ヴィクトリア朝から現代に至る女性たちの物語を書こうとしたのである。21 世紀の現代においても、食器洗い機や電子レンジのような文明の利器が女性の解放に大きな役割を演じていることに変わりはない。女性の方が男性よりも、文明の恩恵に浴しているといえる。だから女性の Eleanor が常に新しいものを受け入れ未来志向であったのに対して、男性の Whatney は過去の栄光にしがみつこうとしていたのだろう。

「現代」の章のクライマックスとなる Delia のパーティーに集まった人々の中で、North や Peggy たち 30 代の若い世代が、人生に対して懐疑的になり、未来に希望を見出せないのに対して、老いた Eleanor たちの世代は、若い時の怒りや不満を通り越して、皆、生きることを楽しみ、人生を肯定的に捉える。若い時の偏狭な堅苦しい生き方を捨て、年齢を重ねる度に、人生を楽しむことを覚え、家から解放され、家族に頼らず、ポジティブにそして自由に生きる Eleanor は、いわば理想の老年を生きる女性である。

結 論

Katherine Mansfield の描く孤独な老女とは、対照的な明るい老女 Eleanor を創造した Virginia Woolf であったが、*The Years* の完成から4年後、1941年3月28日、夫 Leonard に宛てて、次のような遺書を残して自殺する。

I feel certain I am going mad again. I feel we can't go through another of those terrible times. And I shan't recover this time. I begin to hear voices and I can't concentrate. So I am doing what seems the best thing to do.... I don't think two people could have been happier till this terrible disease came. I can't fight any longer. I know that I am spoiling your life, that without me you could work.... What I want to say is I owe all the happiness of my life to you. You have been entirely patient with me and incredibly good... I can't go on spoiling your life any longer. I don't think two people could have been happier than we have been⁷⁾.

夫の手厚い介護を受け、作家としての名声を得、仕事も充実し、作品の中では前向きに生きる老女を描いた Woolf が自殺を遂げ、一方、夫は頼りにならず、孤独と貧困の中で病と闘い、作品の中でも孤独な老女を描いた Mansfield が最後の瞬間まで生きようと懸命に努力していたとは、何ともアイロニカルな現実である。

Woolf は遺書の中で、“I am spoiling your life,” “I can't go on spoiling your life any longer,” と繰り返し、自分の介護が夫の人生と仕事を台無しにしているのではないかという罪の意識を明らかにしている。重い病で倒れた時、自宅で愛する家族から献身的な介護を受けられる人は幸福である。しかし、もしも介護のために家族の人生を台無しにしていると感じたら、その罪の意識もまた苦しい。それは Woolf にとって、自殺の一つの動機になったかもしれない。

Katherine Mansfield と Virginia Woolf の老いと死、および彼女たちの作品に登場した老いた女性たちの姿は、21世紀の今日に生きる私たちに、今もなお多くのことを教えてくれる。繰り返しになるが、1922年10月14日、Mansfield の最後の誕生日となる、34歳の誕生日の長い日記の言葉が印象深い。

But perhaps to people who are not ill, all this is nonsense. They have never travelled this road. How can they see where I am? All the more reason to go boldly forward alone. Life is not simple⁸⁾.

手塚裕子

誰も自分の死に直面する時まで、本当の死について知ることはできないのかもしれない。死の恐怖がどれほど恐ろしいものであるのか、愛する家族と別れて一人で死に向かって歩くことがどれほど淋しく孤独であるのか、また、死を目前にした人の目には見慣れた庭の風景がどれほど美しく映るのか、誰も本当には知らない。死は最大の“the mystery of Life”である。

2006年7月31日に88歳で亡くなった社会学者で歌人の鶴見和子さんは、死の一ヶ月前、妹である内山章子さんに「死にゆく人がどんな歌を詠み、何を考え、何を思って死んでゆくのかを、あなたは客観的に記録しなさい」と告げた。それからの一ヶ月、妹は姉の言葉を克明に記録した。死の一週間前、和子さんは弟の鶴見俊輔さんに、「死ぬっておもしろいことねえ。こんなの初めて」と言うと、弟は「そう、人生とは驚くべきものだ」と答え、二人は大笑いしたそうである。内山さんによれば、鶴見和子さんの死に対する考えは、「人は必ず死ぬ。逃げることはできない。ならば受け止めよう。」だった⁹⁾。鶴見氏と同様の覚悟は、Mansfieldの日記にも見られる。

One must submit. Do not resist. Take it. Be overwhelmed. Accept it fully. Make it part of life.... Life is a mystery. (1920年の日記)¹⁰⁾

抗い難い運命の大きな力と直面するとき、人は諦念と受容の覚悟を見出すのだろう。先に逝った人々が残してくれた言葉の本当の意味を、私たちは自分の番になった時、初めて知ることになるのだろう。(2008年11月)

使用テキスト

Mansfield, Katherine. *The Stories of Katherine Mansfield*, ed. Antony Alpers, Oxford Univ. Press, 1984.
Woolf, Virginia. *The Years*, 1937, rpt. Hogarth Press, 1990.

伝記

Alpers, Antony. *The Life of Katherine Mansfield*, Viking Press, 1980.
Tomalin, Claire. *Katherine Mansfield: A Secret Life*, Alfred A. Knopf, 1987.
Bell, Quentin. *Virginia Woolf: A Biography*, Harcourt Brace, 1972.

註

- 1) 朝日新聞, 2008年7月27日。
- 2) 上野千鶴子, 『おひとりさまの老後』, 法研, 2007年。
- 3) Drabble, Margaret. "Katherine Mansfield: Fifty Years On," *Harpers & Queen* (July, 1973) p.106, p.107, and p.135. および, Showaler, Elaine. *A Literature of Their Own*, Princeton Univ. Press. 1977.
- 4) Mansfield, Katherine. *Journal of Katherine Mansfield*, ed. John Middleton Murry, Constable, 1954, pp.271-2.
- 5) *Ibid*, p.333.
- 6) Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf Vol.IV*, ed. Anne Oliver Bell, Hogarth Press, 1982, rpt. Penguin, 1983, p.6.
- 7) Bell, p.226.
- 8) *Journal of Katherine Mansfield*, p.333.
- 9) 朝日新聞, 2008年7月25日夕刊。
- 10) *Journal of Katherine Mansfield*, ed. John Middleton Murry, Constable, 1927, p.164.